

## 絵でよみがえる、瀧神社と龍頭が滝の風景（その4：森為泰の旅行記から）

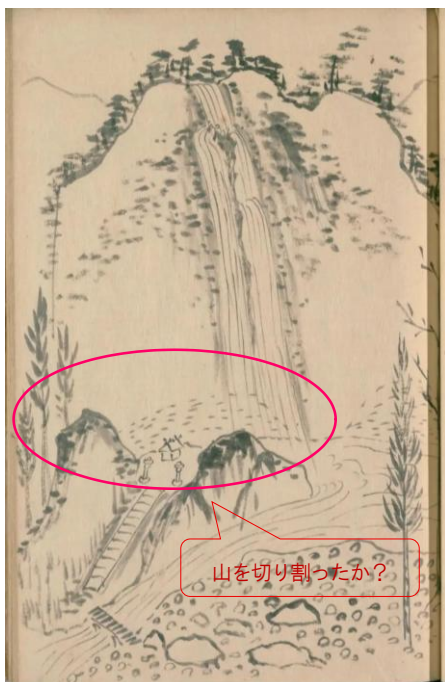
今回は、松江藩士で歌人でもあった、森為泰（もり・ためひろ）の書いた旅行記に、焦点を当てています。彼は、出雲市佐田町にある須佐神社に参拝したことがありまして、そのときの旅行の様子を、『大宮詣』という文章（紀行文）に残しています。下に掲載した絵は、その紀行文の中に収められたものです。

須佐神社詣（もうで）の旅程ですが、旧暦明治5年4月18日に松江を出発し、来待から三刀屋、鍋山の深谷を抜けて、須佐神社に参拝します。そこから尾崎坂を越えて、松笠に到着。龍頭が滝を見てから、掛合に向かいます。さらに大東を通過して、松江に5月13日に帰った、というものです。宿は、和歌の弟子など、知り合いの人たちのところに泊めてもらったようで、須佐や掛合でも宿泊しました。松笠に着いたのは、5月1日。これは旧暦なので、西暦にすると、1872年6月6日となります。

さて、この絵に描かれているのは、明治5年時点の、龍頭が滝の姿だと思われます。以前紹介した絵では、瀧神社の前には鳥居がありました。灯ろうになっています。また、瀧神社のあった場所ですが、もともとは山だったのですが、その一部分を切り割って平地にし、ここに瀧神社を造営したことを伺わせます。神社に向かって右側には、小山が描かれていますから、瀧神社があった時点では、瀧神社と、撤去しなかった残りの小山が並んでいて、洞窟への進入の邪魔をしていたのかもしれない。

そういえば、以前、1717年頃にできあがった『雲陽誌』には、「龍頭瀑 瀧坂をのぼり華表の前より岩下にいたる この所を龍頭と称して瀧あり」と書かれていることを紹介しました。ここをよく読むと、瀧神社の横を前に進むと岩下（洞窟）にいたる、という表現ではなく、「華表（鳥居）の前より岩下にいたる」とあって、瀧神社の横を真っすぐに奥に進入することは、できなかったもので、洞窟に行こうとする参拝者は、右横方向に迂回して、ようやく到達できたことを暗示する描写となっています。

右の写真は、現在の龍頭が滝を撮影したものです。土砂は撤去され、平地になっていて、洞窟に、真っすぐに進入できるようになっています。山の土砂がすべて撤去された時期ですが、昭和26年ごろのことだったのではないかと推測します。（そう考える根拠については、別の機会に紹介したいと思います。）さて今回は、徒歩で龍頭が滝に行くと、何時間かかるのか？をテーマにしたいと思います。



現在は山はすべて撤去

『出雲紀行』7-8号、国立国会図書館デジタルコレクション  
<https://dl.ndl.go.jp/pid/2538202> (参照 2026-03-18)。図形の一部変更あり。